

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



金剛山の冬景色。「樹氷と霧氷の中間ぐらい」という白く粧った木々の枝が美しい

Contents

- GEN 第14回会員総会のご案内 P 2
- 自然と親しむ会報告 P 2
- 生命と環境、循環と廃棄 P 3
- 建設現場のゼロエミッションへの取り組み P 4

2008.3

120

認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク

緑の地球ネットワーク 第14回会員総会のご案内

北京オリンピックを8月にひかえ、中国は良くも悪くも世界の注目を集めています。大気汚染や食品の安全性などが問題視され、事前合宿を韓国や日本でおこなう国も少なくないとか。大気汚染や水質汚染への取り組みはなかなか困難ようですが、緑化に関しては積極的にすすめられています。なかでも大同は、北京・天津の水源、また

風砂源として、21世紀に入ってから国家級のプロジェクトが目白押しの状態です。そんななかで、民間団体のGENにどのようなユニークな緑化ができるか、いっそうの工夫が必要とされています。

今年は夏のワーキングツアーを実施しないかわりに、専門家の調査団を派遣し、じっくりと現地をみて、今後の

緑化の方針を考えていくつもりです。

【緑の地球ネットワーク

第14回会員総会】

●日時：6月21日（土）13時30分～16時40分

○記念講演：13時30分～15時

『植物による土壌水分の輸送』

吉川賢さん（岡山大学教授）

○会員総会：15時20分～16時40分

●場所：大阪市立総合生涯学習センター
第1研修室（大阪駅前第2ビル5階
各線「梅田」駅、JR「大阪」駅／
東西線「北新地」駅）

●総会終了後の懇親会は調整中です。

自然と親しむ会報告

すばらしい雪景色を堪能しました

大林由美子（GEN会員）

前日強風で金剛山のロープウェイが止まるなど、実施があやぶまれましたが、当日は好天、伊藤孝美さんに案内していただき、樹氷を眺めながら新雪を踏んでのウォーキングを楽しみました。2月24日、17人が参加しての自然と親しむ会『冬の金剛山散策と自然観察』の報告です。

前日から天候が心配されましたが、絶好の散策日和でした。私にとっては小学生以来の雪山登山（？）で緊張しました。電車、バスを乗り継いで2時間あまりでたどり着きました。

ロープウェイ乗り場へは10分弱車道と階段をのぼり、さらにロープウェイで7分ぐらいで着きます。マイナス8℃、積雪50cm（午前8時）とありました。ロープウェイに乗ってすぐ下を見ると、まるで別世界。木々の枝々に、氷が着き、

白いオブジェのようでした。あとで伊藤先生にお聞きすると、「霧氷と樹氷の間」とのこと。山頂付近は白くけぶっていました。「ここにきてよかった!」と思いました。

参加者は17名。アイゼン着用は正直歩きにくかったです。思ったより歩く距離は少なくゆったりめでした。ところどころで伊藤先生が木々の説明をしてくださいました。なかでも興味深かったのは、杉の樹皮がけばだっているの

は、むささびが駆け上がった跡だというお話でした。

山頂ではマイナス7℃にも関わらず、グループ、家族連れでにぎわっていました。手袋をはずし、凍えながらお弁当を食べました。思ったより寒くもなく過ごせ、野鳥も見つけました。可愛いさえずりでしたよ。

散策はロープウェイ乗り場で解散。ルート

もなだらかな所あり、急な坂道もありで全体的には楽な方でした。ですが、雪の下が凍結している所もあり、注意も必要でした。私は金剛山は初めてでしたが、人気があるのもわかる気がします。次は新緑の頃かな。毒蛇も出るらしいので気をつけてまた行ってみましょうか。みなさんもぜひどうぞ。

助成が決まりました

（財）イオン環境財団から、小学校付属果樹園に対して100万円の助成が決まりました。ありがとうございます。

GEN事務所から お願い

春は新しいスタートの季節。進学・就職・転勤などでお住まいが変わることも多いと思います。住所・電話番号・メールアドレスなどの変更がありましたら、GEN事務所にご一報くださるようお願いいたします。



歩いている間は寒くもなく、絶好の冬の散策を楽しんだ



生命と環境、循環と廃棄

川島 和義 (GEN 副代表・地方公務員)

12月の第1回にひきつづき、1月29日にGREENなんでも勉強会『生命と環境、循環と廃棄～ごみ対策を考える』が開かれ、24名が参加しました。第1回の内容とあわせて、講師にまとめていただきました。

環境は、あるものを取り巻く周辺を指す言葉であるから、環境問題は、環境が取り巻いている「あるもの」の問題でもある。「あるもの」は、この場合人間であるから、したがって、環境問題は人間と環境の関係についての問題である、と言える。

動物保護運動などに熱心な人たちの中には、人間中心主義を批判して、保護すべき動物を中心にした環境を議論する者もいる。しかし、私たちはハエや蚊が生息しやすい環境を求めているわけでもなく、天然痘の病原菌が絶滅したことを悲しむわけでもないのだから、環境に取り巻かれている主体は、人間に限定して考えた方がいい。人間以外の動物や植物は、環境の方に含めべきものであろう。

しかし、人間を含めた生物は、大きな生態系の循環の中で生息している。したがって、生態系が安定的に持続する環境が、人間にとって望ましいということになる。

人間を構成している物質は、鴨長明

が方丈記で「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」と書いたのと同様に、原子レベルでは絶えず入れ替わっている。昨年の「私」と今年の「私」は、物質面では別人になっているのである。だから、継続して存在している「私」というものは、物質そのものではなく、物質の運動状態であり物質の関係であるということになる。物質と物質の間に存在している「私」は、死ぬこともなく、昨年来流行している歌のように「千の風」になったり、畑に降り注ぐ光になったりすることができるのである。

このように考えてくると、「私」は人間という枠組に収まりきらなくなるので、「私」を生態系全体にまで拡張して、生命と環境という関係で環境問題をとらえることができる、ということで生態系から世界を観ることにする。

生態系の循環は、太陽から放射される光のエネルギーの流れによって造り出されている。下図は、このエネルギーの流れを示したもので、地球に届く太

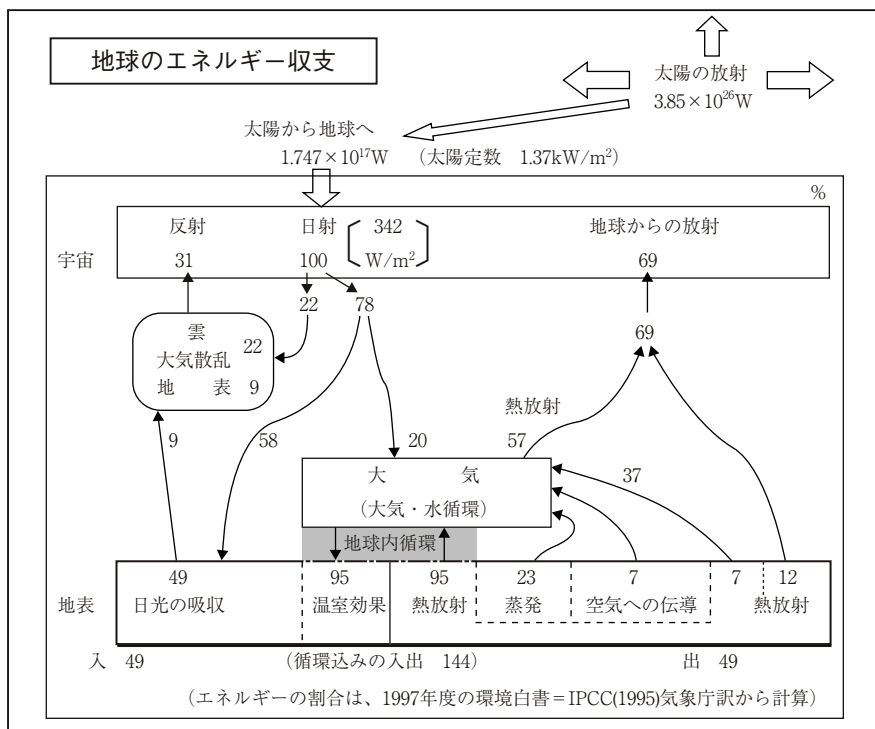
陽エネルギーの31%は反射され、69%が吸収されていることを示している。地球が一定の状態に保たれているのは吸収された69%のエネルギーと同じだけのエネルギーが地球から放出されるからである。

吸収されたエネルギーは、そのまま放出されるわけではなく、水を蒸発させ、蒸発した水が上空でエネルギーを放出して水滴に戻り落下するというような循環を造り出している。また、図1の着色した部分に示されている温室効果は、エネルギーが地球内で循環し、その間にいろんな仕事をするを表している。これらのエネルギーの流れが造り出す物質の運動の中に、生命現象も存在することができるのである。

物質の運動は、摩擦を受けて停止する方向に向かおうとするが、このとき運動のエネルギーは熱に変わって拡散し地球外に捨てられるのと同時に、新たなエネルギーが太陽から補給されてエネルギーの流れが維持されるので、停止することなく継続するのである。

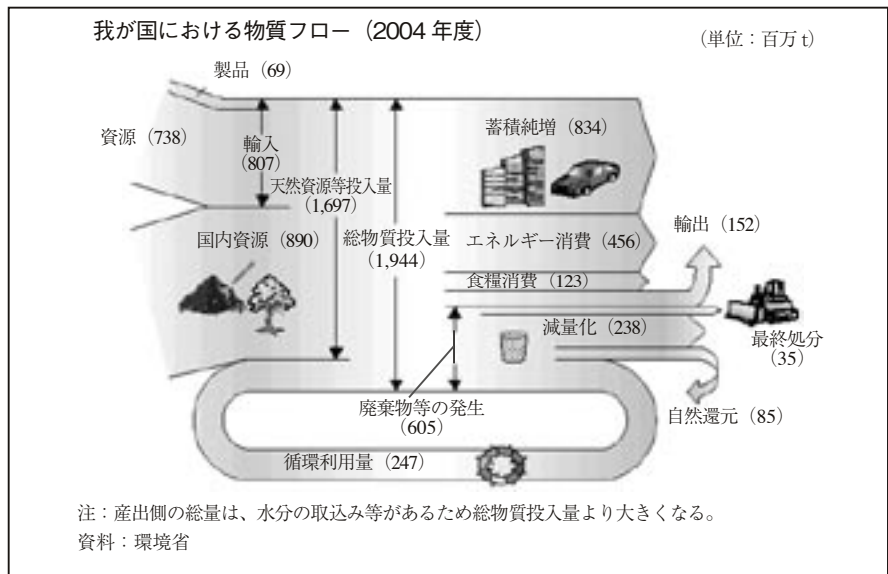
物質は重力によって地球に閉じ込められているので、永続する地球上での物質の運動は循環になる。循環は、その中に小さな循環を内包するようになり、進化して生命が生まれる。このような生命活動にとっての循環は、物質を外に出さないことではなく、廃棄を適切に行うシステムとして機能している。代表的な例である血液循環は、体内の細胞に栄養や酸素を送り届けるとともに、体内に発生した二酸化炭素や不要となった物質を熱とともに体外に運び出す働きをしている。また、血液自身も古くなったものは分解して排泄され、新たに作り出した血液と交換される。不要な物質は、糞尿や汗として適切に排泄されるのである。

排泄された糞尿等は、これを分解する生物に任せるのが自然である。自分で処理しようなどという不自然な考え



を持つと、たいへんな苦勞を抱え込むことになる。廃棄物問題を抱え込んでごみ戦争を始めた人類は、このような不自然な姿を象徴しているように見える。戦争を終わらせる道を模索したいものである。

最後に、環境白書に掲載されている日本の物質収支の図を御覧いただく。「エネルギー消費」と「減量化」は、利用された資源が燃焼によって二酸化炭素などの気体として排出されていることを示している。その他の利用された資源は、蓄積を増やすか廃棄物として排出されるが、蓄積もいつかは廃棄物になる。最終処分や国内資源の大部分を占める土砂やセメントの移動は、循環しない、地球の構造を変えている。二酸化炭素は、基本的には循環するものだが、排出速度が速すぎるので大気



中の蓄積量が増え、地球の熱代謝機構を変えて、気候変動を生じさせていると考えられている。循環型社会は、生

態系のサイクルの中に埋め込まれた社会であり、人工的リサイクルの拡大を求めるものではない。

建設現場のゼロエミッションへの取り組み

橋谷 勇治（GEN会員・建設会社勤務）

橋谷さんには、昨年11月17日の関東ブランチャ月例会で、『建設業からみた環境問題』というテーマでお話していただきました。興味深いテーマなので、会報にも寄稿をお願いしました。廃棄物削減の現場での具体的な取り組みの例としてわかりやすくまとめていただきました。

1. はじめに

洞爺湖サミットを前に地球環境問題が様々な形で情報機関やマスコミで取上げられているが、とくに地球温暖化問題でのCO₂排出量削減への取り組みが大きな話題になっている。

建設現場では、これまでも建設副産物のリサイクルやゼロエミッションへの様々な取り組みをおこなってきたが、実はこのようなゼロエミッションへの取り組みが機材の搬出入量の削減に繋がり、廃棄物の収集運搬効率を上げ運搬量を減らすことに結びついている。このことを確認する意味で、実際の施工現場でおこなわれている建築・設備施工におけるゼロエミッション活動の事例を紹介したい。

2. 建設現場でのゼロエミッションとは何か

建設現場においては、工程の進捗に応じて様々な資材が運び込まれ、それぞれの工事の段階で建設廃棄物が生じ

て、最後は現場から外へ運び出される。この搬入される資機材やそれに付属して持ち込まれる梱包材などを必要最小限の形に削減する（リデュース）ことが、生産の現場におけるゼロエミッションの取り組みのひとつである。また各工事段階で排出される建設副産物を再利用（リユース）したり、再生利用（リサイクル）することで最終的に埋め立て処理される廃棄物の量を減らすことも、社会的にみたゼロエミッションの取り組みのひとつだ。

1) 建設現場でのリデュース（reduce）

各工事の段階で、各施工会社が持ち込む資材や梱包材で、最終的にゴミ（廃棄物）となるようなものを極力減らすこと、つまり資材を加工した後の端材、残材が少ない工法、または発生しない工法を選択し採用することである。その事例としては省梱包、無梱包といわれる方法（写真）や、通い函や持ち帰りパレットなどの採用で、現場では梱



防水材の簡易梱包

包材の廃材が発生しない方法がある。最近多くなってきているのが、事前に工場加工できる部分をふやす工法（プレカット工法、ユニット組立工法など・写真）を採用し、現場での加工を減らし端材や残材の発生を少なくする工法だ。また、その他にも仮設材を減らし残材や廃棄物の発生を減らす工法を採用することもある。

2) 建設現場でのリユース（reuse）

現場の資材や建材は新しいものを持ち込む場合が多く、前の建物で使ったものを別の建物で使うことは意外と少ない。それでも幾つかの事例を紹介しよう。庭にあった植栽や庭石を再度自分の庭で使うか他の場所で利用することは多いし、また古い建物や記念物など付加価値の高い特殊な材料は再利用される。住宅用の柱、梁などの古材や



左) 家具ユニット
組み立て
下) プレカット工
法

窓枠、サッシなども丁寧に取り外せば、他の建物で再利用ができ、その例も最



近増えてきている。また、仮設材も従来の木製型枠にかわって、鋼製やプラスチック製など、寿命が長いものを半永久的に使って、廃材の発生を抑えている。このように、再利用などにより、ひとつの現場から発生する廃棄物が、10分の1とか100分の1とかに削減されれば、それを運搬する車両を削減でき、ひいてはCO₂排出削減に繋がるのである。

3) 建設現場でのリサイクル (recycle)

建設現場でのリサイクル活動の歴史は古く、現場から排出される建設副産物をリサイクル施設などへ持込むことで、限りある資源を有効利用できるうえに廃棄物処理費用もいくらか削減できるので、積極的に進められている。そしてこの活動で大事なことは、まず



コンクリート碎石の場内利用



プラスチックの場内破碎

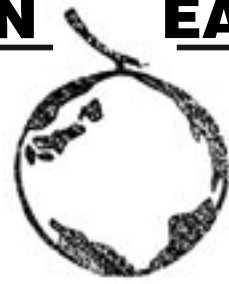
作業所で利用できるものは自ら利用することで、建設副産物の運搬費用を削減できてCO₂排出削減に最も効果的であるということを認識すべきである。例えば、発生土や建設汚泥、コンクリートなどを自分の作業所で再利用する(写真)ことにより、大きい現場では数千台のダンプや生コンクリート車両の運搬を削減した事例がある。

また、プラスチックなどを現場内で破碎し(写真)、運搬効率を上げてリサイクルメーカーへ持込むなどの取り組みもある。

以上が、3R運動とか3R推進活動と言われている取り組みの概要である。このような取り組みは、建設業の3団体を中心に「建設業の環境保全自主行動計画」を策定した項目の中に盛り込まれており、関係行政機関や関連業界との連携を保ちつつ地球環境負荷の低減に努力し、持続可能な経済社会の構築への取り組みを進めている。

3. おわりに

具体的な事例を上げて、建設現場の



建物緑化(アクロス福岡)

リサイクルやゼロエミッションへの取り組みを紹介したが、この他にも、建物全体を緑化(写真)することや、事務所だった建物をマンションに改装したり、長寿命建物を作るなど、経済的にも有効でなおかつ地球環境への負荷の削減に結びつくことを実行して、更なる地球環境への貢献活動を進めていきたい。

GREEN なんでも勉強会

『アフリカをたのねて』2回シリーズ

砂漠から熱帯降雨林、湿地から高山。広い大地に多様な地形、気候、動植物をもつアフリカ。

その魅力にみせられ、足繁くアフリカにかよっておられる石原務さんに、2回シリーズで話していただきます。豊富な写真・映像が楽しみです。

アフリカ大陸は、長い時間をかけて東西に引き裂かれつつあります。大陸東部を南北に6000kmにわたって走る『大地溝帯』がその証です。この壮大な地球の営みは、一方で3000m級の山脈、もう一方で水深1400mの湖をつくりだし、また、サバンナと熱帯降雨林という気候の違い、さらに地形と気候の違いにともなう動植物のバリエーションを生み出しました。

第1回は、その大地溝帯周辺のようなすを、たくさんの写真を見ながら話していただきます。

また、2回目は、50万年前から人類

が暮らし続けてきたといわれ、1万年から5000年前の岩絵が残るサハラ砂漠や、スイカやヒョウタンの原産地といわれるカラハリ砂漠のお話です。

第1回

『アフリカ大地溝帯とサバンナ・熱帯降雨林』

●日時：4月22日(火) 18時30分～20時30分

第2回

『サハラ・カラハリ砂漠』

●日時：5月20日(火) 18時30分～20時30分

場所は2回共通です。

●場所：大阪市立弁天町市民学習センタ(JR環状線・地下鉄中央線「弁天町」駅下車すぐ)

●講師：石原務さん

●参加費：700円

●主催・問合せ先：緑の地球ネットワーク(GEN)

植物屋のこぼれ話 (続編) その 18

立花 吉茂 (GEN 代表・花園大学客員教授)

●ラワン材

中国北部での緑化にはあまり関係のない話だが、世界中の有用植物を調べていると、どうしても南方材が頭に浮かぶ。中でもわれわれにとってもっとも関係の深いのがラワン材である。自宅にいても職場でも部屋の中を見渡せばたいがいこの材でできた柱や家具類が目につく。日本人の生活にこれほど深くかかわっている植物も少ないだろう。

通称ラワン材はフタバガキ科の数属、数種が含まれており、決して単純ではないが、果実(種子)が柿に似て双葉のような形の尾ヒレがくっついている共通点がある(写真)。東南アジアの熱帯多雨林に生えるが、タイ国などの熱



フタバガキの実



サラワクのラワン

帯雨緑林にも乾燥型の種類がみられる。しかし、本場のものに比べるとその大きさでは雲泥の差がある。

戦争が終わって10年もした頃からラワン材の買い付けがはじまったが、中国系の業者だけでは量が足りず、日系商社が現地に入り込んで伐採をはじめた。フィリピン南部のラワン材が取りつくされ、東マレーシアのボルネオで伐採がさかんにおこなわれていた頃、大学の東南アジア学術調査がはじまっていた。私も先陣をきって下調べを兼ねて植物採取に出かけていた。

ラワン材の生えている場所が見たい、またどのように伐採し、輸送し、加工されるのかを知るため、東マレーシアのボルネオへ、日本の商社が入り込んでいる伐採現場へ行った。自然林はいわゆるジャングルだが、利用できるラワンの木は10アールあたり2~3本しかない。周辺の木が邪魔になるからほとんど皆伐状態にしていた。「これはひどい自然破壊だ」と思った。高さ50メートルにも達する高木で、樹冠ははるか上の方に拡大していて、根元は板根になっている。樹冠を切り捨て、板根の上(高さ3~4メートル)で切るから、伐採後はまるでミサイルが突っ立っているようだ。上の樹冠には多数の着生植物がくっついているが、貴重なラン

類が多かった。捨てられた樹冠からこれらを採取したことを覚えている。切り倒したラワン材の幹を2~3メートルに切り揃え、ブルドーザーで山の下の川までひきずり降ろす。ゆっくり流れる川に繋留して筏を組み、下流の港サンダカンへ集める。サンダカンの港湾にはこうして取ってきたラワン材がひしめき合い、日本船に積み込まれる。船の到着した大阪港では検疫の済んだ材木が港湾に面した工場であつというまにベニヤ板に変身した。このベニヤ板がまた南の方の国へ売られていくのだから皮肉なことである。日本の経済成長の初期にはこのような自然破壊が平気でおこなわれていたようである。

●有用樹木の研究

独立したばかりのマレーシアにはまだ植民地時代のイギリスの各種の施設が残されていた。その中のサンダカンの有用樹木の研究所は、日本で言えば営林署であるが、その内容のすばらしさには驚かされた。有用樹種300点の材幹標本がずらりと並び、まるで博物館のようであった。あらゆる標本は学名、英語名、土語との対照表が付記されていてラワン材として利用できるものには植生中の優占度まで書いてあった。ここには植物分類・生態学専門のメイヤー博士がいた。彼は伐採のやり方を上手にやれば60年で回復するが、皆伐すれば数百年かかる、と語った。伐採している者と同じ日本人として耳が痛い話だった。

黄土高原史話〈39〉

一字に込めし想いは深く

旧臘、本誌編集子から1月発行号への原稿依頼(督促?)あり、ついでに「このシリーズ、あとどのくらい続きますか」と。ボランティア執筆の気楽さもあって、長期連載も苦にならず。そのうえ、10万年前の旧石器時代から始まって、最近ようやく紀元後の後漢時代に入ったところ。次第に専門から遠ざかるが、この先、軽く50回は超えるのでは。

しかし、「文章は中身で読ませる」という意気込みとは裏腹に、読んで下さ

谷 口 義 介 (摂南大学教授)

るのはたぶん少数の知人のみ? ところが前回、初めて外部からの反響が。

下に「水」と「土」を並べ、上に「木」を書いて新字を作り、これを「もり」と訓ませる掲出の文字^{もり}森^{もり}に関し。

そもそもこの字の存在を知ったのは、高見邦雄 GEN 事務局長『はくらの村にアンズが実った』の中。51ページに掲げてあり、リコーのセミナーで聞いた話として、市民参加の森づくり活動の看板に「こんな字を書いた人がいる」



と好意的に紹介。拙稿も、感心しつつ「どなたの作字か知らないが」と。

偶読された長野県・木水土里研究所代表の桃井奉彦という方が、GENを介し一書を寄せられ、関連の資料数点を恵送。作字は北海道で『森の子どもの村』を主宰される徳村彰氏の手になるとして、同封の冊子『森に生きる』17ペー

ジに説明あり、とご教示。以下、同書中の一節「木・水・土=森と人」より、その概略を。

森は単に木が沢山あるところではない。木と水と土との間に人間を含むあらゆる生命が育まれる所だから、それを表わす字は森ではなく、森でなければならない。しかしこの字は理づめで作ったものではなく、毎日森へ通ううち天啓のようにひらめいた。もともと「木」の下に並べた「水」と「土」は左右逆だったが、大阪の書家 乾 千恵に書いてもらったとき、今の形になった。千恵は中学生のころから何度も「子どもの村」に参加、脳性マヒで車イス生活だが、不自由な左手に太い筆を持って凄い字を書く。だからこの字は彼女との合作ともいえる、と。

冊子『森に生きる』(1998年、森の子どもの村発行)は、1995年から1年間、計51回にわたり毎日新聞日曜版(東日本)に連載したものがメイン。連載終了後、同出版局との間で本にする話があったものの、森字を使うか否かで見解が分かれ、結局は実現をみず。徳村氏は、この一字に込めた「自らの思想と生きざまにこだわっ」た、と。

今回掲出の字は冊子『森に生きる』の題字として用いられたもので、徳村杜紀子氏の筆になる。彰氏の夫人にして、共に「子どもの村」を主宰。私たちの世代には『美と集団の論理』の著者として知られた哲学者・中井正一氏の御次女の由。「杜」はリングに似た実をつけるバラ科の落葉亜喬木だが、国字では「もり」の意味あり。

いまあぐできる GEN への協力

■会員になってください！

まだ会員になっていない方、ぜひ会員になって GEN の活動をささえてください。また、環境問題や国際協力に関心をお持ちの知り合いに、会報の購読などをおすすめてください。

■みみずく基金にご協力ください！

1口1万円で寄付を募っています。A. 環境林センター、B. 霊丘自然植物園、C. 白登苗圃、D. かけはしの森の4つからお選びください。指定のない場合は、事務局で決めさせていただきます。

■カササギの森に参加してください！

1ha分5万円を1口として寄付を募っています。落葉広葉樹や花木も植えられ、植栽完了間近ですが、早魃で07年の植栽結果が思わしくありませんでした。もうしばらくの間、実験林場“カササギの森”に参加していただくチャンスがあります。

■緑化基金、運営カンパもとむ

金額はいくらでもけっこうです。GENへの寄付は、税制上の優遇措置の対象となります。みなさんの応援をお願いします。

*みみずく基金、カササギの森、緑化基金の20%は事務管理費になります。

■ビデオ『よみがえる森』ご購入を！

沙漠化、水不足など黄土高原の環境問題と GEN の緑化協力を30分にまとめました。価格は5,000円、GEN 会員価格は4,000円(送料別途)です。教材にも好適。小学校高学年から。

■古切手を集めています

普通切手、記念切手、外国切手なんでもOK。周囲を1cmほど残して切り取ってお送りください。

■書き損じはがきを集めています

書き損じはがき、古い未使用のはがきを回収しています。通信費にあてています。

■外国コイン・商品券などを集めています

使うあてのない図書券、文具券、各種商品券、外国コインがありましたらお送りください。

■出版物を購入してください

『ぼくらの村にアンズが実ったー中国緑化協力の10年』高見邦雄著／日本経済新聞社／本体1,600円(GENでは1,600円+郵送料290円(1冊)で取り扱っています)

『雁棲塞北』(『ぼくらの村に…』中国語版)高見邦雄著／李建華・王黎傑

訳／中国国際文化出版公司／GEN事務所にご注文ください。1冊1,000円+郵送料290円でお送りします。

『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』橋本紘二写真集／東方出版／本体6,000円(GENでは送料込み6,000円で取り扱っています)

■ボランティア募集

会報発送や事務所の手伝いなどのボランティアを随時募集しています。ボランティア可能な曜日、時間帯をご連絡ください。来ていただきたいときに GEN 事務所から連絡します。

* * * * *

【GEN は認定 NPO 法人です】

2005年6月から国税庁から認定 NPO 法人の認定を受け、07年6月からは第2期目の認定が決まりました。GENへの寄附金は寄付金控除の対象となります。個人の場合は「寄付金額-5,000円」を所得金額から控除することができます。法人の場合は損金に算入することができます。相続・遺贈による寄附は相続税の課税対象から除かれます。

GENの場合寄付金となるのは、緑化基金・運営カンパ・カササギの森協力金・みみずく基金と、会費のうち1口以上の部分・賛助会費から12,000円をひいた金額です。くわしくはお問い合わせください。

情報ひろば
いっしょなかたち

六甲奨学基金のための
第 11 回古本市

阪神大震災の年にはじまった、アジアからの留学生・就学生のための六甲奨学基金。その募金活動の一環の古本市も 11 回目となりました。

●受付期間：3 月 1 日～31 日まで（この期間以外は受け付けられません）

●送付方法：直接持参または送料送り主負担で送付

【注意】

- ・汚れ・破れのひどいものは不可。
- ・辞書大歓迎。絵本、マンガ、洋書可。
- ・雑誌、教科書、参考書、コンピュータ解説書、百科事典などは不可。
- ・お送りいただいた本は返せません。

●送り先・問合せ先

（財）神戸学生青年センター古本市係
〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1
tel. 078-851-2760 fax. 078-821-5878
e-mail : info@ksyc.jp URL http://ksyc.jp/

★六甲奨学基金のための第 10 回古本市

●3 月 15 日～5 月 15 日まで毎日開催

本の整理などのボランティアも募集しています。上記までお問い合わせください。

*当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。

*当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月 15 日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

土佐ブントンをどうぞ

土佐の春の香、土佐ブントンをご案内します。お早めどうぞ。

●土佐ブントン

A	3L	9 玉前後	3,800 円
B	2L	10 玉前後	3,300 円
C	L	12 玉前後	2,500 円
D	M	15 玉前後	2,000 円

すべて 5kg。10kg 箱もあります。

送料別途・関西 630 円他（20kg まで）

※売り上げの一部を GEN に寄付していただいています。ご注文の際は『GEN の会員』とひとことそえてください。

【注文先】田中農園 田中隆一さん

〒781-7412 高知県安芸郡東洋町河内 203 (TEL/FAX 0887-29-2500)

E-mail : tanakan@sky.quolia.com)

馬が瀬国有林
ふれ愛の森林づくり
10 周年記念活動

ボランティアでの水源の森づくりが 10 年をむかえました。記念活動に参加しませんか。

午前中は 10 年前の造林地の補植、下

草刈りなどをしたあと、昼食後は馬が瀬の自然観察をお楽しみください。

●日時：4 月 29 日（火・祝）9 時 50 分～15 時ごろ

●集合：JR 湖西線「北小松」駅前に 9 時 50 分

●場所：馬が瀬国有林

●参加費：1000 円（昼食、資料代。小学生は無料）

●持ち物：手袋、お茶、森林内を滑らず歩ける靴。雨具。

●定員：100 名（先着順）

●申込み：3 月 31 日までに住所・氏名・電話番号・子どもの場合年齢を明記して下記までハガキ・FAX・メールで。

●問合せ・申込み：NPO 法人自然と緑（〒537-0025 大阪市東成区中道 3-2-34 tel. 06-6978-5060 fax. 06-6978-5061 e-mail : sizen_mi@osb.att.ne.jp URL http://home.att.ne.jp/iota/sizen_midori/)

